

# 音楽指導技術の向上を目指した授業の構想 ～授業研究を中心とした地域貢献活動～

白石文子\*、菊池真理子・小川暁美・山根大輔\*\*

\*岩手大学教育学部、\*\*岩手大学教育学部附属小学校

(平成29年3月9日受理)

## 1. はじめに

現在、岩手大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）では、「『創発の学び』<sup>1)</sup>」を実現する教育課程の創造」という研究主題のもとに、各教科等における「創発の学び」の在り方を研究している。本研究は、「創発の学び」を実現するために必要な音楽指導技術の向上を目指した授業を構想し、それに基づく授業研究会を開催することによって、地域の教員の音楽指導技術向上にも貢献することを目的としている。この地域貢献活動には、将来教員として音楽科教育に携わることが期待される、岩手大学教育学部（以下、学部）の学生の教育も含まれている。

附属小学校音楽科は、昨年度も、学部のプロジェクト推進支援事業の一環として、地域音楽教育の向上のための授業研究会を開催した<sup>2)</sup>。今回は、その成果と課題を踏まえて、さらに研究を深め、地域貢献の質を高めようと試みた。

## 2. 方法

上記のような趣旨のもとに授業研究会を企画し、小学校をはじめ、中学校や高等学校も含む岩手県内の教育関係機関に案内状を送付した。今回は、より多くの参加者を募って複数の教科・活動を参観してもらうため、英語活動との共同開催とした。音楽や英語を専攻する学生を中心とした学部の学生にも広く参加を促し、以下のようなプログラムで授業研究会を実施した。

「平成28年度岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業 音楽科・英語活動合同授業研究会」

日時 平成29年2月17日（金）13:00～16:30

場所 岩手大学教育学部附属小学校

参加費 無料

内容

- ・研究授業1（音楽）（45分）題材名 3年生「いろいろな音を合わせて楽しもう」<sup>3)</sup>
- ・研究授業2（英語活動）（45分）
- ・授業研究会等（音楽科または英語活動）  
音楽科
  - ・授業研究会（45分）
  - ・合唱または吹奏楽指導法講習（各30分）

昨年度の研究結果を踏まえ、今回は以下の5つの観点から授業研究会を構想した。

①創作以外の分野における「創発の学び」の授業  
昨年度は、高学年（5年生）の創作指導について研究授業を実施したため、今回は、鑑賞領域との関連もはかりながら、中学年（3年生）の歌唱分野における研究授業を構想した。

②教科書教材を用いた授業

現代的な教育課題である附属小学校の研究主題に即して教科書教材の扱い方を提案することにより、地域の音楽科教育に貢献する。研究授業を参観する教員は自身の実践と比較でき、学生は教科書や教師用指導書を見て予習できる。

③参加教員

授業研究会を、若手・中間層・ベテラン教員および学生の交流の場にする。特に若手教員と学生が、基礎的な指導技術を学ぶ場にする。また、小中連携という視点から、中学校音楽教員の参加を呼びかけ、授業および合唱・合奏指導について、

小中学校に共通する指導技術を、特に若手の中学校教員が学ぶ機会を提供する。

④授業後の研究会における若手教員・学生の発言  
昨年度は、授業改善について活発な議論がなされたが、時間が足りなかったこともあり、若手教員が意見を述べたり、学生が発言したりする機会はなかった。授業研究会において、若手教員や学生にも意見を述べる機会を設ける。

#### ⑤合唱・合奏指導技術

部活動としての合唱・吹奏楽における基礎的な指導技術と、授業における合唱・合奏指導および「創発の学び」との関連をはかる。

### 3. 結果と考察

音楽の研究授業の参観者は約50名であり、その後の音楽科の授業研究会に参加したのは24名であった。その内訳は、現職教員8名、学部の音楽専攻学生9名、その他の専攻学生3名、および学部・附属小学校関係教員4名であった。現職教員8名の内訳は、小学校教員5名、中学校教員2名、高等学校教員1名で、そのうち40～50歳代のベテラン教員が6名、中間層が2名で、採用後2～3年の若手の参加はなかった。研究授業と授業研究会、および合唱・吹奏楽指導講習についての結果と考察は、以下のとおりである。

#### (1) 研究授業

主な旋律と副次的な旋律（3音のオスティナート）が重なり合う部分の歌い方を工夫するという、3年生の歌唱の研究授業が、菊池教諭によって実践された。鑑賞と歌唱を関連づけた構成の題材であり、児童にとっては、はじめて2つの旋律を重ねて歌う、合唱の導入段階であった。2つの旋律の役割、音程、リズム、音量バランスを工夫の視点として、どのようにしたら旋律がきれいに重なるのか、児童が自分たちで解決策を探していけるように授業を組み立てた。その際、児童が主体性・創造性・協調性を発揮して、集団で新しい音楽的

価値を生み出そうとする、「創発の学び」が実現されるように構想された。

#### 【写真1】研究授業



参観者のアンケートの記述からも明らかなように、授業では一貫して児童の主体性が保たれ、児童たちは一生懸命、生き生きと活動していた。本時の課題設定からまとめまで、教師が児童たちと一緒に考え、児童の考えや言葉を次々と引き出す授業であり、児童たちが主体的に発言して、授業を進めていった。児童はグループ単位で歌い、聴き、考えて発言するという活動を繰り返しながら、集団での課題解決に取り組んだ。課題は難問で簡単には解決できなかったが、児童たちは最後まで集中して粘り強く活動していた。

参観者のアンケートには、授業の成果に関して以下のような記述が見られた。

- ・「創発の学び」が、授業の中でいろいろな場面に見られた。
- ・「創発の学び」で目指している子どもの姿を実際に見ることができて良かった。
- ・児童があれほど主体的に活動する歌唱の授業をはじめて見た。聴き合ったり考えたりすることを、おろそかにしていた自分の授業を反省した。
- ・「主体的」「子どもから引き出す」という姿勢が徹底されていると感じた。

しかし、児童の歌唱技能については課題もあった。児童たちはいろいろ工夫を凝らしたが、主な旋律につられて副次的な旋律をうまく歌えず、2つの旋律をきれいに重ねて歌うことは困難であった。あるグループが歌った時、部分的に美しい和

音の響きが生まれ、聴いていた児童たちから「おーっ」と声があがった。その響きを生み出したいためか、その後も各グループで努力したが、児童たちが達成感を得られるようには歌えなかった。

## (2) 授業研究会

45分間の予定で行われた授業研究会では、はじめに授業者である菊池教諭が、今年度6月に附属小学校で開催された学校公開研究会の研究紀要<sup>4)</sup>に基づき、本日の授業は「創発の学び」を実現するために、児童の主体性・創造性・協調性を重視して構想されていたことを簡単に説明した。続いて授業の意図と反省点等が述べられた後、質疑応答では、児童が終始懸命に考えて意見を述べながら課題に取り組む主体性と創造性が発揮されていた点が高く評価された。

しかし、懸命に難題に取り組む過程で、中間の音楽表現に対して「合っていない!」「間違ってる!」といった批判的な発言があり、それを課題解決に発展させられなかった点で、協調性に問題があったとの指摘があり、主体性・創造性とのバランスの取り方が今後の課題となった。また、具体的な指導法については、音量バランスを考えながら、2つの旋律をきれいに重ねて歌うことができなかった点で、どの発言者からも指摘されたため、これについて、なぜできなかったのか、どうしたらうまくできるのかを、小グループで討議した。参加者は、現職教員1~2名と学生2~3名からなる5つの4人グループに分かれ、短時間であったが、活発な意見交換がなされた。

その後、各グループの討議内容を発表したのは、5グループとも、まだ発言していない学生であった。2つの旋律をうまく重ねられなかった原因として、児童は、それぞれの旋律の役割を理解できていない、どのような音量バランスがよいかというイメージが持っていない、互いのパートにつられて正しい音程で歌えていない、といったことがあげられ、それらをどう解決すればよいか、具体的な指導法が提案された。

その後、まだ発言していない現職教員に意見や感想を述べてもらい、最後に学部の白石准教授が、附属小学校の研究主題である「創発の学び」の視点を振り返り、異校種教員や学生との交流の意義に触れ、予定時間を10分ほど超過して、授業研究会は終了した。

授業研究会での議論や参加者のアンケートから、以下のような今後の研究課題と改善のための視点を得ることができた。

- ・「創発の学び」で児童が新し音楽的価値を見出すようにするには、創意工夫に加えて、音と音の変化による児童の達成感も大切である。
- ・めざす音楽のイメージを持たせ、それを実現するための要素について考えさせ、試させる。
- ・児童の主体性に任せていたのでは解決法を見つけれない場合、教師が児童の状態を正しく見取って適切な解決法に導く。
- ・表現について創意工夫する力と表現技能の両方を高める。ただし、単なる技能練習にならないように注意する。
- ・主体性と協調性を同時に大切にし、主体的に考えさせながらも、協働的に学ばせる。

### 【写真2】授業研究会



また、授業研究会に関する現職教員参加者の感想には、以下のようなものがあった。

- ・小学校の授業を見て勉強になった(中学校教員)。
- ・久しぶりにかわいい小学生や真剣な大学生に会って刺激になった(高等学校教員)。
- ・他の教師の指導法を知り、勉強になった。
- ・グループ討議は短い時間ではあったが、人によ

って気づく点が異なり、自分の中でも考えが深まった。

- ・ いろいろな校種、学生の意見が聞けて、とても有意義だった。

- ・ 大学生の、授業を見る目がしっかりしていること、グループ討議の内容をまとめる力に驚いた。

学生たちの感想からは、現職教員の実体験に基づく貴重な話を聞くことができ、基本的な事柄や新たな視点などの様々な話題について、考えが深まったことが伺われる。また、音楽専攻ではない学生からは、「音楽の研究会は、専門性の高い先生方の意見をたくさん吸収できるから、とても楽しい」といった感想が得られた。

### (3) 合唱指導法講習

合唱指導法の講習では、附属小学校合唱部の4・5年生(6年生は引退)の指導が、小川教諭によって実施された。若手の教員や学生、合唱指導が得意ではない教員の参観も考慮し、授業における合唱指導や、主体性・創造性・協調性を重視する「創発の学び」との関連もはかった。

児童が新曲に取り組む際の指導の苦労が大きいことから、部分的に二部合唱を含む新曲を仕上げた内容とした。「はじめから完成形を目指して歌う」という指導理念のもとで、まずはじめに教師が曲を通して独唱した。次に、教師がフレーズごとに繰り返し歌い、個々の児童はそれを聴いて歌えると感じたら立って一緒に歌った。教師が3回ほど繰り返して歌うと、全員が立って歌えていた。この段階から理想的な歌い方に近づけ、不適切な歌い方が身につかないように、ブレスや抑揚のつけ方などもフレーズごとに丁寧に指導した。二部合唱になる部分は、全員が両方のパートを歌えるように、組み合わせや合唱隊形を変えて指導した。

参観者のアンケートには、以下のような記述が見られた。

- ・ 今まで合唱指導について学ぶ機会がなく、手探りで指導していた。また機会があれば、ぜひ参観したい。
- ・ 音楽の授業と異なる部分は多かったが、部活動

の指導であっても、児童の主体性を大切にしていた。

- ・ 授業のように一列ごとに歌い、どこがよいか、どこを直したらよいかを児童に考えさせていた。
- ・ 学年や性格など、指導者が子ども一人一人をよく観察して言葉を発しているように感じた。
- ・ 一つ一つ丁寧に進めて、児童のイメージを大切にしながら取り組み方をしていた。

### 【写真3】合唱指導法講習



今回は、参観者の中学校教員がピアノ伴奏を弾いたり、部分的に指導したり、大学生がパートの歌唱支援をしたりしたことにより、効率的に合唱作りができた。このような外部の教員や学部学生との交流は、合唱部の児童たちにとっても大変よい刺激となった。教師自身も、パートに1人、しっかり歌える児童がいることの効果と、そのようなリーダーを育てる重要性を再認識できた。また、中学校教員と協力して指導する効果も実感できた。

### (4) 吹奏楽指導法講習

吹奏楽指導法の講習では、附属小学校吹奏楽部の4・5年生(6年生は引退)の指導が、菊池教諭によって実施された。若手の教員や学生、吹奏楽指導が得意ではない教員の参観も考慮し、主体性・創造性・協調性を重視する「創発の学び」との関連もはかった。

具体的には、①表情をつくったり雰囲気明るくしたりするためのアイトレーニング、②腹筋を鍛えたり、筋肉を柔らかくしたり、拍感を養ったりするための各種体操、③ロングトーン、タンギ

ング、音色の変化などの基礎トレーニング、④曲を仕上げるための指導を、どのような力をつけるために行っているのかという意味を参観者に説明しながら実施した。楽器を持たない身体運動では、児童主体で活動させ、楽器の基礎トレーニングでは、どうすればよいか考えながら一人ずつ音を出させ、その音を他の児童全員で聴いて評価させた。曲を仕上げるための指導では、よくできたところと改善すべきところを、児童に考えて発言させた。

#### 【写真4】吹奏楽指導法講習



参観した学生たちからは、以下のような感想が述べられている。

- ・基礎練習が、はじめて見るものばかりで驚いた。
- ・身体を使って拍感を養ったりリズム感を養ったりすることは、現代の子どもたちにとって特に必要だと感じた。
- ・短い時間で基礎練習が重点的に行われていて感心した。
- ・部活動であっても一方的に指導するのではなく、普通の授業のように児童に発言させる機会を設けたり、一人一人を指導するなど、子どもを第一に考えた指導だと感じた。
- ・小学生の吹奏楽の練習を、はじめて見ることであったので、また見てみたいと思った。

基礎練習の大切さ、児童の主体性や創造性を重視した吹奏楽指導の在り方を、参観者は実感できたようである。講習の最後に、参観者から一言ずつ感想を述べてもらったことが、児童たちの励みにもなった。

#### 4. まとめ

以上の結果から、今回の授業研究会の構想の5つの観点について、次のようにまとめることができる。

①創作以外の分野における「創発の学び」の授業については、今回の歌唱分野の授業において、主体性・創造性・協調性といった「創発の学び」の視点を踏まえた、具体的な指導法について議論が深まった。参観者に現代的な教育課題を意識してもらえたことに加え、今後の研究を進めるための視点も得られた。

②教科書教材を用いた授業については、「創発の学び」を目指した歌唱指導がどのようなものになるのかを、参観者の指導経験と比較して実感してもらえたようである。また、事前に教科書や教師用指導書を見て予習をした学生からは、「予習して想像していた授業とは異なっていた」「予習をすることで実際の授業を見る目が変わり、勉強になると思った」といった感想が述べられた。実践経験のない学生であっても、予習をして自分なりに授業を予想することによって、授業研究会が、より有意義になったと思われる。

③参加教員については、今回、期待していた若手教員の参加がなかったが、中学校教員をはじめ、高等学校教員や、音楽が得意ではない小学校教員、音楽を専攻していない学生、中学校教員を目指している学生の参加により、様々な立場の教員に共通する授業構想の視点や具体的な指導技術について、話し合う機会を提供することができた。

④授業後の研究会における若手教員・学生の発言については、4人グループの討議の場を設けたことにより、学生たちも全員意見を述べることであった。今回は論点が絞られたことから、短時間でも効率的で有意義な議論ができた。しかし、1時間弱の研究会は駆け足で、グループ討議も全体討議も、もう少し時間をかけたかった。

⑤合唱・合奏指導技術については、部活動としての合唱・吹奏楽の指導に慣れた教員や学生にも参考になる基礎的な指導場面を参観してもらい、合唱指導では、授業における指導とも共通する新

曲の指導技術を、吹奏楽指導では、授業でも使えるような、楽器を持たないで実施する各種身体運動も提示した。いずれにおいても、部活動の指導で「創発の学び」を実現する可能性を、参観者に示すことができた。

今回の授業研究会のようなプロジェクトに期待することとして、アンケートには以下のような現職教員の記述が見られた。

- ・とてもよい機会である（中学校教員）。
- ・またこのような授業研究会があれば、ぜひ参加したい。
- ・このようなプロジェクトを県内に広めていることに意義を感じる。
- ・引き続き、小学校の枠を超えた参加者での授業研究の場を設けてほしい。
- ・学生から刺激を受け、気が引き締まる。
- ・学生たちが真剣に取り組んでいることが嬉しかった。次世代を担う若者には、更に研究して才能を伸ばしてほしい。
- ・音楽のことはよくわからないので、本当に勉強になった。
- ・授業研究会の回数を増やしてほしい。
- ・授業研究会の趣旨を案内状に明記するとよい。

また、参加学生からは、以下のような期待が述べられている。

- ・器楽指導の授業も参観したい。
- ・低中高学年とまたがって授業を参観したい。
- ・「創発の学び」に関する授業を継続してほしい。

このように参加者は、今回の授業研究会に、異校種教員や学生との交流の場、および、学生や音楽が得意ではない小学校教員のための研修の機会としての意義を感じている。また、できれば回数を増やして、歌唱・器楽・創作・鑑賞の全分野と全学年を対象とした「創発の学び」の授業を公開してほしいと期待している。

以上のことから、今回の授業研究会は、地域の教員と学部学生の音楽指導技術の向上に貢献することができたと言える。今後は、授業研究会の趣旨と、交流・研修の場としての意義を案内状に明記して、より多くの参加者を募りたい。また、小

中学校の教員が協力して指導する価値が実感できたことから、附属中学校との研究交流の可能性についても考えたい。さらに、外部の教員や学生との交流は、児童たちにとっても大変よい刺激となったことから、地域の児童や教員に刺激を与えられる、出前授業のような形の授業研究会の可能性についても模索したい。このことは、参加する学生たちにとっても、岩手県の音楽科教育の実態を把握する機会になると思われる。

#### 注・参考文献

- 1) 「創発」とは、「個々の考えを合わせながら、集団として新しい価値を創り出そうとする営み」であり、「創発の学び」とは、「教育課程の中で創発を実現していこうとする集団の学び」である（岩手大学教育学部附属小学校教育研究会『「創発の学び」を実現する教育課程の創造（第一次）－各教科等における「創発の学び」－研究紀要 第32集』2016, p.6）。
- 2) 詳細は、白石文子・菊池真理子・小川暁美・山根大輔「創発の学びを創造する授業の構想～授業研究から考える地域音楽教育の向上～」岩手大学教育学部『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業 教育実践研究論文集 第3巻』2016, pp.57-62 を参照。
- 3) 教育芸術社の小学校3年生の音楽教科書（小原光一ほか13名著『小学生の音楽3』2015, pp.50-51）に掲載されている題材である。
- 4) 前掲1) 岩手大学教育学部附属小学校教育研究会『「創発の学び」を実現する教育課程の創造（第一次）』pp.4-9, 66-67。